

艦これ 一黄禍を論ずる手前に捧ぐ一

アテネガネ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

摩耶番長って凄い可愛くて良い女性だと思うんですよ！だから皆さんにもそれを知つてほしいとこの私、防空駆逐艦秋月は思います！

第  
3  
話

第  
2  
話

第  
1  
話

目

次

45 29 1

# 第1話

私は魅せられていた。

咲き乱れる、その閃光に。



「いーち！ にーい！ さーん！」

「おらあ！ 声が小せえぞ！ もつとケツの穴ふん縛つて腹から声出  
せや！」

「はい!!」

いち、に、と更に大きな声が空に響く。

『通達、高雄型重巡洋艦三番艦摩耶改造二号ヲ、舞鶴鎮守府新設部隊旗  
艦兼隊長ニ任命ス』

先月の通達である。

以前より進行していた『敵航空艦隊撃滅部隊設営』の走りとなるべく発足されたこの部隊は、現在摩耶を隊長、以下駆逐三隻から構成されている。

通達があつた当時、摩耶は大分と渋つた。

ガキのお守りなんぞごめんである。

摩耶の古巣は舞鶴の第一艦隊であり、対深海棲艦の花形とも言える誉ある所属だつた。

そんな自分が上の自己満足で作り出されるピーキー突貫部隊への配属とは、心境的には左遷されたのではないかと考え、実際に飛ばされたのだろうと落胆した。

「隊長お！ きついです！」

「つたりまあだろ！ だから訓練なんだよ！」

「はい！」

「文句垂れてんな！ 口じゃなくて身体動かせ！」

「はい！」

「つたく」

「……」

「……」

「……」

「……掛け声言えよ！」

「えっ？」

「ボケてんのかてめえら！」

「はい！」

「これだよ、と摩耶はより落胆の色を濃くする。

絶対わざとだ。

この駆逐艦達は、摩耶を小バカにする事にかけては命を賭けている。

何故だかはわからないが、摩耶の胃を掘削する事が好きらしい。

そんな摩耶の配下にいる駆逐艦は秋月型駆逐艦の一番艦「秋月」、二番艦

「照月」、四番艦「初月」である。

触れ込みはよかつたのだ。

何でも秋月型駆逐艦は防空を旨として建造されたもので、摩耶と新しい役割を持つ艦とのことだつた。

秋月姉妹の前所属横鎮では、品行方正、質実剛健、一所懸命、それが彼女達の評価だった。

摩耶は「左遷されたが地獄に仏」と多少気持ちに折り合いをつけようとしていたのだが……。

「隊長お！ 今、カウント何回目でしたつけ?!」

「これだよ、と本日何度も数えたかわからぬため息を吐く。

「ゼロ回だ」

「えっ？」

「おい、あんまりふざけてつとぶつ殺すぞ！」

「はい！」

「おい、こつちはブチ切れてんのにニコニコしながら返事をするなよ。

カタログスペックのアテが外れるのは世の道理か、しかしこれは酷すぎる。

泣きつ面に蜂とはこのことだ、許してほしい。

摩耶の切実な思いは、今日も彼女らの笑顔を引き立てる事しかできそうもない。

■ ■ ■ ■

黄褐を論ずる手前に捧ぐ

■ ■ ■ ■

「そういうえば隊長、今日らしいですね」

「あ？ お前らの葬儀の日取りが決まったのか？」

「盛大な式にしてください！」

「……」

早朝訓練終了後、適当に訓練報告書を書き事務に提出した摩耶は、早速秋月に絡まれていた。

「ニコニコしてんな、横鎮から神通取り寄せるぞ」

「！ 失礼しました！」

新設部隊が発足してから二週間が経過した。

その間、摩耶がまともに隊長を務める事ができたのは最初の一時間だけである。

その一時間ですら、危険な片鱗を見せていが。

『隊長、これからは敬意を込めて番長とお呼びしてもよろしいでしょうか』

『やつぱり紙ひこうきが飛んでいても撃ち落としたりするんですか？』

『……やはり防空巡洋艦といえど、重巡洋艦同様おっぱいの大きさで

格付けされるのか?』

はつ倒すぞガキどもと思ひながらも、まあ駆逐なんてこんなもんか?  
? と内心もやもやさせながらおざなりに返事をした。

『隊長にしろ』

『そりやもうバンバン撃ち落とすぞ』

『トップシークレットだ』

これがいけなかつた。

諦め切れなかつたのか番長と書かれたハチマキとはつぴを渡して  
くるし、紙ひこうきがどこからともなく飛んでくるし、メジヤーを巻  
きつけてくるしで舐めてかかられた。

そんな日が続くものだから一度秋月姉妹の元嚮導艦、神通の名を出  
して脅してみた。

駆逐にとつての最大の脅威は言うまでもなく嚮導艦なので、取り敢  
えず牽制になればいいやと思い言つてみたのだ。

しかし秋月姉妹は遠く離れた横鎮から、神通を呼べる筈がないと高  
を括つた。

『神通さんは忙しいから、こんな所までこれませんよ!』

それはもう凄いニヤつきだつた。

——気に食わねえ。

上下関係がガバガバの現状は、艦隊運動に不和をもたらす要因にな  
りかねない。

また、ここらで締めとかないと取り返しがつかなくなると予感し、  
貴様らの上司は無理を通して道理を踏み殺すだけのヤバいやつだぞ  
と知らしめる必要があつた。

ので実際に神通を呼んだ。

それはもう、途轍もなく迷惑だつたろうが摩耶には関係ない。

追加で「嚮導の教育がなつてなかつたからこうなつたんだろうか」と、秋月姉妹の前で神通にも聞こえるよう愚痴つた。

愉快痛快とはこの事だと実感した。

神通はかつてないほどニッコリし、全力投球を開始した。

程なくして秋月姉妹は訓練用プールをゲロまみれにし、「お借りし

たプールが汚れてしましましたね。では掃除しましようか」と、もどしたものを舐めるように拭き取る事を命じられた。

振り返つてみると随分小さい女だなと評価せざるを得ないが、円滑なトップダウン方式を採用するため、断腸の思いで行つた事なのだ。

胸とかが痛む。

「何が今日なんだ？」

「はい！ 今日は我らが部隊に空母が配属される日だと聞きました！」

「……あたし教えてないんだけど？」

「それはつまり、自分で調べろという愛ゆえの教育方針ですよね？」

「憎しみが溢れた結果なんだが？」

「今日もツンデレが眩しいです！」

「あたしの知ってるツンデレと違うな……」

「認識の違いは、これから擦り合わせていけばいいんですよ？」

「喧しい、ぶん殴るぞ」

「左の頬も差し出しましようか？」

「いい根性じゃねーか」

お前」ときが聖人の真似事とは恐れ入る。

取り敢えず二回ビンタした後に再び向きなおる。

神通召喚の結果はご覧の通りだ。

効果は遅効性のものなど信じている。

「本日ヒトロクマルマル付けだ。そこで正規空母二隻が配属される。メンドクセーから他のバカにも伝えてこい」

「は、はい。ありがとうございます！」

暴力したのに感謝を述べるな。

そのレベルの変態なのだろうか、少し怖い。

「あの、隊長。もう一つお尋ねしてもよろしいでしょうか」

「あ？ 次は腹でも殴つて欲しいのか？」

「それは素敵な提案なんですけれども」

素敵ではない。

「なぜ空母を倒す部隊に空母が所属するのでしょうか？ それにヒトロ

クマルマルつて……社長出勤がすぎませんか？」

「一つじやねーじゃねーか」

「あ、本当ですね！ さすが番長！ よくお気づきで！」

「あたしは番長じやねえ、人違いだ」

と言い腹を小突く。

……おい、きやつきやするな鬱陶しい。

正規空母が所属するのは元から決定されている事であり、そもそも全員に通達がいつてるはずで、その理由もしつかり説明されている。ざつくり言うと”毒を以て毒を制する”だ。

そもそも敵機を撃墜するだけでは制空権は得られない。

真に航空戦を制するには、空をこちらの機体で埋める必要がある。摩耶は正直に言うとこんなくだらない初歩中の初歩な説明したくないのだが、きっとわざと尋ねたのだろうと思い至り嘆息する。

時間についてはわからぬ。

ただならぬ理由もあるのだろう。

「と言う事だ、理解したか？」

「え？ 今何もおっしゃってませんよね？」

駆逐は地の文を読み解く特殊技能があると聞いていたのだが、そうか嘘だつたのか。

「そんなものあるわけないじゃないですか！」

「しつかり読み解いてんじやねーか！」

メンドクセー奴だよ本当に。

「そんな事よりもどんな空母が来るんですかね？ 五航戦の先輩方だといいなあ」

「それはねえだろ。多分、普段クソみみたいな態度のお前らをぶちのめすために、神通が空母に改装したはずだ。それが来る」

「冗談きついですね……」

「……」

「何で黙るんですか？」

「冗談だといいな」

「え……、え？」

冗談はさておき、あたし自身もどの空母が配属されるのか聞いていない。

恐ろしいほどの職務怠慢だ。

普通部隊長くらいには事前に連絡がいくものなのだが……。

まあ龍驤とかならどんな手を使つてでも情報封鎖する事くらい意味もなくしそうだ。

龍驤は軽空母なので違うだろうが。

「はーあ、まあ嘘だ嘘。そんなクソでも漏らしたみたいな面してんじゃねーよ」

「……」

「何で黙るんだよ。え……、え？」

「ば、番長……」

「嘘だろお前」

「はい！ 嘘です！」

「キック！」

「いつ、ありがとうございます！」

「何でだよ！」

何にせよこれで説明の手間が一回で済んだ。

これは僥倖だ。

三回もこんな調子で説明していたら大破しそうになる。  
それでは配属される空母に申し訳が立たない。

というか舐められる。

一だか二だか、五の字だか知らないが空母に下に見られると後々に影響が出る。

奴らが艦ではなくプライドの擬人化なのだと信じてやまない摩耶は、今日のファーストコンタクトを結構重要視している。

奴らは自分が認めない者に忠誠を誓う事はまずない。

まあ忠誠なんて持たれても鬱陶しいだけなのだが、従うか反目するかのゼロか百かの連中だらけだと疑わない摩耶にとつては纖細な問題だ。

実際に、誇りに塗れた者が空母には多いので摩耶の警戒は的を射て

いる。

「それは空母だけに、つてことですか?!」

失敗は『敵航空艦隊撃滅部隊設営』という計画自体を頓挫させかねない。

「無視ですか……?」

「あ？　ああ、罰走したいたって話か？」

「的を射ている、が空母の弓矢とかけてるナイスジョークかつていう話です！」

「やつぱり罰走の話か」

「違いますけど、番長がお望みならばそれも構いません！」

「……ヒトロクマルマルまでには帰つてこいよ」

「はい！」

秋月は散歩でも行くかの様にステップを踏んだ。

「あ！　おい！　秋月！」

「！　何ですか?!」

名前を呼ばれただけで喜ぶな。

犬かお前。

「番長つて呼ぶな！」

いちいち面倒だが大事な事だ。

訂正させなければならぬ。

「気をつけます！　番長!!」

神通の効果は、未だあらわれそうもない。

■ ■ ■

「隊長、聞きたい事があります」

「曇、照月にナンパされた。

部下が自分の曇飯を「空母盛り」した事を姉妹艦の鳥海に愚痴つて

いる最中である。

その主犯がこいつだ。

いったいどのツラ下げてやつて来やがつた。

鳥海も引いて……いや、よく見るとニヤついてる。  
お前もか。

「何の用だ、今あたしは鳥海といぢやついてんだよ。邪魔すんな」

「そんな事言わずに！ お願ひします！」

「いいんじやない？ 摩耶、聞いてあげても」

「あのな鳥海、こいつらは一回事を許すと、神通を目の前にするまで  
延々とつけあがるんだぞ？」

「そんなに酷くはないですよお」

犬かお前。

しゅんとするんじやねえよ。

鳥海がキュンときちまつてんじやねーか。

「何があつたの？ 私にも聞かせてくれる？」

「チヨ口すぎんだよお前はさあ……」

「はい！ それじやあ聞きますね？ ……本日付けで空母が来るつて  
ほんとおですか？」

「秋月呼んでこい、しばいてやる」

「何ですか？」

やろうう説明せずに散歩行きやがつたな、許せねえ。

「詳細は秋月に聞くか秋月を拷問して聞き出せ。いいな？」

「お、穩やかじやないですね……」

「それが嫌なら、聞く事自体を諦めろ」

「もうつ！ 摩耶？ 自分の子たちに冷たくするだなんてかわいそう  
でしょ？」

「あたしのガキみたいに言うな」

「違うんですか？」

「艦検に診てもらえ、その頭」

「姉妹共々すごいって言われてるから平氣です！」

「平氣じやねえ！」

それは絶対やばい方のすごいだ、そんな評価を受け入れるな。  
正気でもないのか。

「ふふ、聞いてた通り本当に可愛い子ね」

「え！ 隊長！ 隠ではそんな評価をしてくれていたんですね?!」

「たまたま鳥海の耳がぶつ壊れてる時に、お前らの不満を言つちまつてたらしいな」

「普段から私たちの話をしてくれているなんて感激です！」

「壊れてんのはお前の頭か？」

何がこいつらをここまでポジティブにしているのか皆目検討がつかない。

薬でもキメてるんだろうか。

だとしたら隊長としての責務を果たさねばならない。

頭の一、三ひねれば、薬も絞り出せるだろうか。

「おい、お前の脳みそ捻転させるからちよつと頭力チ割れよ

「それは暗号文ですよね……？」

「ああ、死ねって意味だ」

「鳥海さん……！」

鳥海に抱きつく照月、だが残念だつたな、そいつはこつち側の人間だ。

以前、砲塔が破損した際に拳で敵を討とうとしたくらいだ。

肉体言語に文句をつけるような女じやない。

「摩耶！ どうしてそんなに酷い事を言うの？ 謝りなさい！」

「……」

味方が陥落した。

おかしい、高雄型の眞面目担当が畜生の陣営に取り込まれてしまつた。これが世に聞く闇堕ちつてやつた。

このままでは秋月姉妹の謀略により、高雄型姉妹離散の憂き目にあいかねない。

仕方ねえ、質問に答えてやろう。

「今日の四時に来るんだつてよ、空母」

「あ、隊長が軍用語を使わない時は本当にめんどくさがつてゐる時だつて、前に教わりました」

「よく知つてゐるね照月ちゃん」

「はい！ 愛宕さんに聞きました！」

高雄型重巡洋艦二番艦「愛宕」は摩耶の姉妹艦であり、高雄型頭ゆるゆる系女子担当だ。

主に駆逐への餌付けと懐柔、あわよくばねんごろを目指すロリコンだ。

「おい、姉貴には気をつけるよ。あいつは触れた相手の脳みそをスポンジに変える能力を持つてる」

「牛ですか……？」

「似たようなもんだろ」

「そなんですか……？ あ、そうですね」

不思議な顔をした後に自分の胸を見てカラツと言つた。

そのうちこいつも大きさに悩まされる日が来るのだろうか。

というかこいつ、駆逐のくせに結構でかいんだつたな。許せねえ。

「とは言えお前の頭はすでに海綿体だから気にすんな

「確かにそうですね！」

「そうじやねーよボケ」

あたしがバカにしたのに、あたしに撤回させるな。  
お前は否定する事を覚える。

……そんな事は置いておくとしてだ。

喫緊の問題は愛宕だ。

やろう、ついにあたしの部下に手を出しやがった。

危険な兆候だ、奴がかかわつたが最後、B S E じやないが部隊がスカスカになつてしまふ。

……仕方がない、手を打つておくか。

「あの、何で愛宕さんに気をつけなくちやいけないんですか？ 悪い  
人には感じなかつたのですが」

「摩耶は嫉妬してゐるよね？」

「ええっ⁈ 隊長がジエラシー⁈ ギヤップ萌えですか!!」

「さつさと頭を切り開け、スカスカになつたぶんを粘土で詰めなおしてやる」

「愛宕姉さんは私たちが軽巡の頃からの付き合いなんだけどね？ その頃から仲良くしてた娘を横から捕つてつちゃう人だつたのよ。だから警戒してるのよねー？」

「隊長ー！ かわいいー！」

「ひつづくな保菌者やろうが！」

鳥海もいい加減にしろ。

そんな嘘にまみれた宣伝をのたまうな、こいつが信じたらどうするつもりだ。

残りのバカどもにも誤認されてしまう。

愛宕については、何の事はない。

単純に部隊の駆逐が奴の手に墮ちると、そちらにうつつを抜かしまともな艦隊運動がとれなくなるのだ。

それは統治する側として、とても面倒臭い。

つまり迷惑を被る前に対処する、それだけだ。

「姉貴と仲良くするのはお前の勝手だ好きにしろ。でもな、それで仕事サボるような事があつたら罰走じや済まさないから覚悟しておけよ」

「……何をされるんですか？」

「お前、脳みそ触つた事あるか？ 結構。ブニブニしてるんだが、……特別に触らせてやる」

「もしかして、それは私のモノでは？」

「よく気づいたな、生きたまま自分の頭の中触るだなんてなかなかできない事だぞ。よかつたな」

「私の頭に執着しすぎです隊長」

「あ？ 心配してるんだよ。あたしはお前の頭に脳じやなくてクソが詰まつてると疑つてるんだ。この目で見させろ、疑いを晴れさせろ」「そんな人間はいませんよお……」

ふむ、どうやらあたしの沈痛は通じたようだ。

これで少しはマシになるといいのだが……。

「おい鳥海何だその顔は、につこりするな」

「ん？ ふふ、本当に仲が良いんだね貴女達。ねえ照月ちゃん、摩耶をお願いね？」

「うん！ お任せください！」

「うんじやねえよ」

「ゆりかごから墓場まで面倒見ます！」

「先に死ね」

「私が死んでもあとの二人が……」

「立ちはだかるな」

「ううん、あの世に引きずり込みます」

「仲良しこよしはお前らだけでやれ！」

「何が何でもあたしを殺そうとするな、引導を押し付けるな。

「おい、もういい頃合いだろ。さつさと行け」

「え？ 頃合いとは？」

「秋月もそろそろ帰つてくる頃だつて言つてんだよ」

「あ、空母の件ですね？ いや、でもそれは隊長が教えてくれたじゃないですか」

「あ？ なに抜かしてんだ、交代で罰走行けつてんだよ。ボサツとしぐさつてんな」

「そ、そんな……」

「秋月は喜んで駆けて行つたぞ、お前は違うのか？」

「秋月姉の変態性を、私に求めないでください」

驚いた、こいつにも一般的な見地があつたとは、部下の意外な一面を発見してしまつた。

別段嬉しくないが。

「まああたしは、お前の良し悪しは聞いちやいねえ。走るか営倉か好きな方を選べ」

「横暴です……」

「お？ 嫌なら隊を抜けていいぞ。早速書類持つてこい」

三人分な、と言いかけたところで「防空駆逐艦照月、抜錨します！」と叫び飛び出して行つた。

別に脱隊してくれてもいいのだ。

そうすれば、まあ、第一艦隊に復帰できるかはさておき、この謎の部隊からあたしも逃げ出せる公算が高くなるのだから。

「摩耶、しつかり勤めなきやダメだよ？」

「やる事はきちんとやるよ、でも奴らの自由意志は尊重しなきやなんねーだろ」

「……」

「辞めたいって思うんじや、仕方ねーから辞めさせる他ないだ……、その顔やめろ」

「ちゃんとしなさい」

「……」

鳥海にこう強く言われると、あたしとしては大きく出れない。  
仕方がない、鳥海の顔に免じて隊長職は続けてやろう、と内心思う  
摩耶であつた。



「隊長、特に用はないのだがコバンザメしてもいいか？」

「よくねえ」

昼過ぎ。

事務に今日配属される空母の情報を聞き出そうとして、失敗した帰りのことだ。

イライラしたから鎮守府通常船舶用埠頭で海に向かい呪詛を吐いていたら、初月にストーキングされていた。

「お邪魔する」

「マジで邪魔なんだが、腹に擦り寄るな」

「おっぱいでもいいのか？」

「あたしに触れるなって言つてんだよ」

「それじやあコバンザメになれないじやないか！」

「早く人間になれ」

なぜか怒鳴られてしまつた。

上官に向かつて何をしているんだこいつは、バカなのか？

「ふん、艦娘に向かつて人間になれ、とはジョークに気が利いているな隊長。そんなに僕の身を案じているのか？ 健全に職務を全うし社会復帰して欲しいと望んでいるのか？」

「ジョークじゃねーし滅びろと思つてるしお前は社会に出せねーよ」

元艦娘逮捕、何て報道見たくない。

軍で密やかに処分すべきだこいつは。

「つれないな、そんなにコバンザメが嫌いか？」

「コバンザメに己の罪をなすりつけるな」

「しかしだな隊長。艦隊においては、旗艦やそれに類する艦に従う義務が生じるだろう？ ならば普段から、その意思を徹底して鍛えておくべきだとは思わんか？」

「鍛えるべきはテーマの儒教観だボケ」

「そこでコバンザメだ」

「うるせーよい加減！」

言つても聞かない（効かない？）事を思い出し、取り敢えず初月を引っ張がす。

……力強いなこいつ。

「おい、離れ、ろ。諦めろ、お前は、人だ！」

「まだ、わからない、だろう。ぐう……、離れてなるものか……！」

「この！」

「何?!」

引いてダメなら理論で、引き剥がせないからこちらに引き寄せ、勢いで足をかけこちらに向けたケツを蹴飛ばす。

そのまま海に落ちろ！

「まだだ！」

「何だと?!」

尻に蹴りを入れた瞬間、こちらに振り向き片手を握られる。

あたしの重量が乗った分、速度は落ち水面に没する事なくコンク

リートに倒れ込む。

「……大胆だな隊長」

「そう思うならさつさと手を離せ」

「大胆で過激で僕の事が大好きだな隊長」

「そう思われたくないから手を離せ」

今、埠頭では重巡が駆逐に覆いかぶさっている犯罪待つたなしの現場が出来上がっている。

このままではまずいと思い、鎮守府から貸与されている拳銃を向ける。

「ま、待つんだ隊長！ より悪いぞそれは！」

「それを決めるのはあたしだ」

「くつ、かつこいいセリフを言うじやないか……！」

「減らす口の元を断つからちよつと待つてろ」

「や、やめて！」

ぎゅっと目をつむり、ハンズアップする事でようやく手を離す初月。

最初からそうしろ。

「まったく、あんましバカなことすると墓石に小便引っ掛けるぞ」

「すでに死んだ体で話を進めないでくれ」

「次にバカした時が死ぬ時だつて言つてんだよ」

「それにしても隊長、おしつこかけるだなんてまるで犬だな」

「ぶち殺すぞクソガキ」

「え!? 冗談も返しちゃダメなのか?!」

まさかここにきて、あたしが犬と呼ぶ前に犬と呼ばれてしまうとは思わなかつた。

ついうつかり気持ちがストレートに出た。

「ふう、何が琴線に触れたかはわからないが一応謝ろう」

「……謝ろううつって、ごめんなさいを付けなくていいのは偉い奴の特権だ。てめーはしつかり、ごめんなさいするんだよ」

「……ごめんなさい」

「それでいい」

と言つたそばから、コバンザメし始める初月。

「死にたいのか？ 何でだ？ 何でだ？」

「いや、待つてくれ隊長。これはコバンザメとは違うんだ」

「コバンザメはそんなに種類がいるのか？」

「別のコバンザメというわけではなくてだな……」

その、と言い淀む初月。

こいつの度し難さにはドン引きだ。

これで「金魚の糞の真似だ」とか言い出したらどうしよう。

頭がオーバーヒートする。

怒るというか、あきれてしまう。

「これを話すのは、凄く恥ずかしいのだがな？」

「お前にそんな感情があつたのか」

「ああ、気前のいい母親が誕生日祝いにくれたんだ」

「挨拶に行かせろ、その不完全な恥をリコールしに行くぞ」

「会つたことがないんだ」

「え……わりい」

いいんだ、と初月は言うがそうもいかない。

艦娘は、少女ならば誰でもなれる可能性がある。

これは時に残酷で、愚かで、優しさに満ちた事実だ。

艦娘の一定数が家と家族を失つた者たちだ。

数が数だけにその事を当たり前のように扱いがちだが、本人達から

したらたまつたものではないだろう。

確かに、全体的に見たらそれはよくある事なのだが、当人達には特別で異常な出来事だ。

そしてそれは失つた者にしかわからない痛みがあり、そうではない摩耶には本当の意味で理解をする事は出来ない。

配慮が必要な事だ。

「僕らは……、三人ともそうなのだがな？ 僕らは気付いた時には孤児でな、親の顔は知らないし、周りにろくな人間はいないし、それは酷いものだつた。生きるためには何でもした、死なないために全てに従つた。犯罪も一通りやつてきた」

「……」

「引いたか？　まあいいさ、とにかく激動の人生を歩んでしまつたせいで僕らは愛に飢えていたんだ。……そんな折に隊長と出会つた。いや、正確には遠くから見た、が正しいな」

そうした生活をしていたのは港町だったらしい。

港町というのは、どこも混沌としている。いつ敵の侵略があるかわからない。そのため人が居つき難く、閑散としがちだった。

しかし、国としては国防の、まさしく壁となる場所をデッドスペースにはしたくないらしい。

まあ当然だ、艦娘をはじめとした軍が羽を休める拠点となるのだから、何も無しじやあ話にならない。

そこで政府は、沿岸部のあらゆる税を軽くしたのだ。

こうする事で空洞化、というか人の流出を防いだ。

しかしそうしてやつてきたのは、一山当てたい商売人とゴロツキだ。

かくして港町という場所は、とにかく手が早くて汚い奴らの吹き溜まりと成り果てた。

初月達のいた港町も例に漏れずそうした環境であつたと言う。

そしてある時、税を軽くしたツケを払わせるかのように深海棲艦が侵攻してきた。

だが舞鶴鎮守府の艦娘らが出撃し深海棲艦を撃滅、被害はあまり出なかつたそうだ。

で、その艦隊の中に当時の私がいたらしい。

三年前との事だが、ギリギリ重巡に格上げされたか、という頃だ。

そんな前の事さっぱり覚えていないが、こいつらにとつては違つたのだろう。

「あの時は、違うな。今もそうなのだが、僕はある敵に感謝してるんだ」

「……何でだ？」

「あの時は、あの町が壊れる事に安心したんだ。僕らにとつてあそこ

は負の遺産だ、リセットできるならこんなに喜ばしい事はない」

「だがその町に被害は出でないんだろ？ わりーがちつとも覚えてねーけど、あたしらが助けたんだからよ。するとなんだ？ 今は何に感謝してるつーんだよ」

「隊長の対空射撃を見る事ができた」

「あ？」

「綺麗だつた。美しかつた。敵機が壊れる事に対してもではない、  
隊長に見惚れたんだ」

「見る目がねーな。そ

だぞ。対空武器はそこまで積んじやいねーはずだ

「しかし、見入ってしまつたんだ」

「わかんねーな」

たたの妙空射撃は見所なんていふ  
ぱつと撃つてばら撒くだけだ。

「そして隊長に会いたいと思い、艦娘になつた。そして何と隊長と同

じ防空艦になれた。三人ともだぞ？ 淫いとは思わないか？」

知音

まあ、何だかわからないが、見知っていた人間に会えてハイになつたつて事か？

何だよ、しゃあ全まてこいへらは暴言叫うんあくべたあたしは間違  
いなく悪者で、嫌な奴してたんじやねーか。

先に言えよ。

「いや、實際僕らは性的に倒錯してゐるから今までいいぞ隊長」「台無しじやねーか

## 責めて欲しい

「オススメを述べるな」

「ただ照姉さんはまだ羞恥心が大分あるから注意するんだぞ？」

「レクチャーやりを始めるな」

「僕はバリネコだが隊長が望むなら逆転してもいいぞ？」

「提案をするな」

「僕らはみんな隊長が好きだ」

「……」

だから構つて欲しくて、ついちよつかいをかけてしまうんだ。と告げられた。

気にくわないが理由はわかつた。

……とはいえ鬱陶しいからやめて欲しいのだが。

「だからこれからも、ふふ、そうだな……。コバンザメさせてくれ」「キック！」

「ぐえ！」

「やつぱりコバンザメなんじやねーか！」

「バカな！　いい話をしたのに蹴るのか?!」

「知った事じやねえ！　うざいつてんだよ！　何でそこでコバンザメなんだよ！　変だろーが！」

「僕らは性的に倒錯してゐからな」

「理由にするな！　理由になつてねえし！」

「まつたく隊長は、何やかんや言いながら僕の性的嗜好に合わせてくれる。……いい人だよ」

「世界一不名誉ないい人だぞそれ！」

まつたくはこちらのセリフだ。

途中まではまあ良かつたが、こいつはこいつだつたという事か。

「……おい、『間宮』に行くぞ」

「どうした？　氣を遣つてくれるのか？」

「ちげーよ、そろそろ約束の時間だ。隊の交友を円滑にするために、菓子折り買つてくれんだよ」

「はは、そういうつて僕らにも買つてくれるんだろう？」

「あ？　……置いてくぞ」

「照れないでくれよ、隊長。それ！　ひつつき虫！」

「鬱陶しいつづーの！」

「ははは！」

くそが、と思ひながらも摩耶は初月を強く引き剥がす事もせず、歩

みを共にした。



「本日1600付けで艦隊に配属された、Graf Zeppelin (グラーフ ツェッペリン) 級正規航空母艦一番艦 Graf Zeppelinだ」

「Buon Giorno! 同じく本日配属された Aquila (アクイラ) 級航空母艦一番艦 Aquilaです! よろしくつ

「……おう」

「番長ー! 押し負けないで!」

「こつちを見るな」

まさかのグローバリズムの波が到来した。

どういう事だこれは。

「……あたしは『敵航空艦隊撃滅部隊設営前段階部隊』旗艦兼隊長の高雄型重巡洋艦三番艦摩耶改造二号だ。……よろしく頼む」

「番長ー! えらい! ちゃんと言えた!」

「ぬまづに言えた!」

「僕を睨まないでくれ」

結局事務から情報を聞き出す事が出来ずに今という勝負に臨んでしまったが、完全に虚を衝かれた。

「ふん、しけた面だな」

「ちょっとグラーフ!」

「いきなりバカにされてしまったな隊長」

「私は隊長のご尊顔好きですから安心してください」

「私もですよ番長」

「うるせえよ」

お前らも自己紹介しろ、と促す。

しかし、しけた面とはな。失礼な奴だ。

「では、私は秋月型駆逐艦一番艦の……」

「もういい」

「え？」

「必要ない」

「グラーフ！」

随分とまあ……、困った奴だ。

「おい、挨拶くらいはさせろ。こいつらはイジメられると喜ぶ質（たち）なんだ。欲を満たすのは程々にさせとかないと躊躇にならない」「私は違います！」

照月が抗議するが、タレコミが先程あつたので無意味だ。  
シカトしよう。

「隊長、その無視も悦ばせているんだぞ」

「微妙に文字を変えてくるな。……グラーフ、犬じやないんだからフラフランすんな。こっちに戻れ」

「くだらん」

「くだらなくねえ。いい歳こいて、そんくらい言われなくてもしやん  
としろ」

「……貴様、私を馬鹿にしているのか？」

「そうだよ。そんでその原因はお前に有るつてさつさと気づけ馬鹿た  
れ」

「なんだと？」

「あー、おいおい今までまで、海越えてケンカしにきたわけじゃねーだろ  
？　いや、わるかつたよ、あたしは口が悪いんだ。今のもマイルドに  
言い直すと『もつと仲良くしよ』って意味だ」

「番長お、それは意訳がすぎますよ」

秋月、いま丸く收まりそうなんだから黙つてくれ。

「今ので丸く收まると思つてゐるなら、隊長も随分ともあるくなりまし  
たねつ！」

照月、後で罰走だ。

「僕も一緒に走ろう」

初月、お前は神通監修のもと横鎮にピットインだ。性癖を治してこ  
い。

「まあなんにせよ、よろしくつて事に変わりはねえ。グラーフ、アクリ  
ラよう」そ日本へ、ようこそ舞鶴へ。これから一緒に頑張ろうな！」

「無理くりまとめたぞこの人」

「隊長も私たちに引けを取らないくらいキャラ濃いですよね」

「番長はすごい人ですね」

だから喧しいってんだよ馬鹿ども。

「……おい、一つ、聞かせろ」

「あ？ 何だ、気を遣うな。一つと言わば沢山聞いていいぞ？」

「貴様は何故、艦娘になつた？」

「なぜ？ つて……」

「……答えられないならもういい」

「あ、ちょっとグラーフ！ ええーと、皆さん、失礼します！」

行つてしまつた。

何だつたんだあいつは、というか困つたぞ？ 完全に下に見られた  
のではなかろうか、めんどくせえ。

「番長、追いかけなくていいんですか？」

「……いま行つても効果ねえだろ。無闇に喧嘩して終わりだ」

「隊長、ですがこのままでは良くないですね？ 会うたびにつづけ  
んどんな態度されたら困ります」

「そうだな」

「隊長、今のは『私は隊長の態度も気にくわない』という宣戦布告だぞ」

「何だと？」

「ち、違いますよ隊長?!」

「照は欲しがりさんだから……」

「不器用な求め方しかできないんだな」

「違うって！」

「だからうるせえつてお前ら」

「ああー、どうすつかなー。と悩むが妙案は浮かばない。」

駆逐なら生意氣でも、力で抑える事ができる。

しかし空母となると話は変わる、子供騙しは通用しない。

「ところで番長、一つお聞きしてもいいですか？」

「あ？ ろくでもない話だつたらグラーフと仲良くなつてもらう」

「それを条件に持つてくるあたり、隊長もよっぽど参つているみたいだな」

「うるせーよ。で、何だ？」

「あ、いや私も番長が何で艦娘を目指したのか気になります。……あ、もしかして赤札ですか？」

「……いや、志願だ」

「へー、そうなんですね。番長面倒臭がりだから、強制されてやつてののかと思いました！」

「ちやつかり失礼な事言つてんじやねーよ」

まあ、あたしの事はどうでもいい。

今はグラーフをどうするか考えなくてはいけない。

「よし、これから意見を募る。いいか？ 採用された奴は、今日一日だけあたしと会うたびにビンタを受ける権利をやる」

「俄然！」

「やる気が！」

「……わきません」

何の事はない、単にグラーフと仲良くなろう作戦を実施するにあたりご意見を募集するだけだ。

「さあ、集（つど）えスponジ脳ども」

「はい！」

「良いぞ秋月、言つてみろ」

「はい！ なぜかはわかりませんが、グラーフさんは我々を気にくわないご様子です！」

「おう、そうだな」

「なので国に送り返しましょう！」

「無邪気にあたしを困らすな」

「良い案だと思ったのですが、どこかダメでしょうか！」

「強いて言うなら、奥の手を手前に持つてきた事だ」

「わかりました！ まだ伏せておきます！」

「おう、それでいい」

「は、はい！」

「よし、むつり言つてみろ」

「照月です！」

「知つてるぞ」

秋月はダメだった。横暴な案を出すとは正直驚いた。  
多分挨拶を中断させられた事を根に持つていて。

「私はグラーフさんと敢えて仲良くする必要はないと思います！」

「お前らあたしの話聞いてたか？ これは仲良くなろう作戦なんだが  
？ ビンタの前借りが欲しいだけなのか？」

「ち、違いますよ?!」

「じゃあ、その案の何たるかを言つてみろ」

「はい。……グラーフさんは少し怖いので、あまり関わりたくないか

らです！」

「お前の気分でものを言うんじやねえ！」

最高にマイペースじやねーか。

無論却下だ。

「ふむ、では僕からも」

「なるほど、案は出尽くしたか」

「……あれ？ 隊長？ 僕が残つてるぞ？」

「あーあ、どうしたもんかねえ」

「隊長ー？」

とりあえず取つつきやすそうなアクイラに菓子を渡して様子を見  
よう。

そんでもしばらくは衝突しないよう気をつけよう。よし、これで行こ  
う。完璧だ。

「僕は無視するのか？」

「そんな面で見るな」

「悲しいぞ？ 隊長」

「手を握るな」

「……」

「なんか言え、脚を絡めるな。おい、ちよつ、触るな！」

「なるほどな、今日のパンツは純白か、いいぞ？ そのギャップ」

「待て、今のタイミングのどこでパンツを見た？」

「ふむ、ほんとに白か……」

「いや、今日は真っ赤なヒモだ」

「なんだと?!」

「いえ！ 今日の番長ファッショソは水玉のはずです！ 私にはお見通しです！」

「待て、待て」

「隊長はズボラなので、上下は揃えていないはずです。なので上はピンクのレースです」

「やめろ、的確に当てるな」

「隊長、なのだな？ いくら女所帯とはいえ、もつとしつかりした方がいいぞ？」

「喧しい」

仕方がないだろう。

こちとら前所属が第一艦隊だったんだ。

出撃数はかなり多い、つまりそれは、損傷しやすいという事を意味する。

そして損傷のツケは制服が支払うのが艦娘のしきたりなのだ。

「あたしの下着は犠牲になつたんだよ……。どいつもこいつも、いいやつだつたのにな」

「戦友みたいに語るな」

「あいつら今、どこにいるんだろうな」「海の底だと思いますよ？」

「深海の奴ら、許せねえ」

「あ！ 番長良い事思いつきましたよ！」

「何だ？」

「海に出て、艦娘の下着をサルベージする事業を始めるんです！ 絶対儲かりますよ！」

「そうか、頑張れよ」

「いくらだい？」

「一欠片五千円からスタートです」

「いいだろう、二万出す」

「ではこちらが駆逐艦初月の物と思われるパンツのパーティです」

「馬鹿な……、僕のパンツだと？　こんな所で、また逢えるなんて……！」

「やだ、感動の再会ですよ隊長……！」

「よかつたな」

どうでもいいが初月がパンツをちゃんと履いているとは思わなかつた。

意外だ。全身タイツが下着とか主張してそうちから驚いた。  
ん？　そういえば何の話をしてたんだつけか。

「あ、おい、三文芝居はやめろ。話を戻すぞ」

「「はーい」」

「んで、グラーフのパンツが何色かわかつたか？」

「そんな話はしてないぞ！」

「しつかりしてください隊長！」

「番長がこわれた！」

冗談だ馬鹿。

「んじゃあ、良い案は出そうもねーから今日は解散にする。寄り道せず真っ直ぐ帰れよ」

「「はーい」」

「はい、じゃねえ、敬礼だろうが」

了解。と三馬鹿の言質を取り、解散する。

これでこの地雷どもは大人しく待機するだろう。

空母とのファーストコンタクトは、まあほんと失敗したが何とかなるだろう。

幸いにして片割れのアクイラはまともだ。

取りつく島が無いわけではない。

柄じやねえが、頑張つていいか。そう思い摩耶は一人、さつそく空

母寮に向かつて行つた。

## 第2話

あの時の女は、上手く生きられてるだろうか？



「げえ！ 対空番長！」

「テメーがそのあだ名の発端か？」

瑞鶴さんよお

空母寮入口前、五航戦こと翔鶴型正規空母二番艦「瑞鶴」に失礼を  
かまされた。

「げえ、とは何だこんちくしよう。

「え！ あはは、まっさかあ。うん、はい……」

おもつくそ睨みつけた。

「ちょっと待つて！ 私は悪くない！ ただ秋月が摩耶の事を教えてって言うから、私はありのままを伝えたまでで……！」

「奴らの不敬はお前譲りか」

小突こうか、と思つたがやめておく。

こいつらは何が原因で堪忍袋の緒がブチ切れるか、全くわからない  
のだ。

以前龍驤に出身を尋ねたら憤慨された。悲劇を繰り返してはなら  
ない。

だから龍驤は空母ではないのだが。

「お前らの同胞に横文字が増えたろ、今そいつらどこにいる？」

「そんなこと言つてるから不良扱いされるんだと思うけど？」

口の悪さは標準装備だ、許せ。

「つーか今のそこまで悪口じやなかつたろ」

「程度が問題なんじやなくてさあ」

「言つちやう」とが問題なのよ。と瑞鶴。

なるほど、そんなもんか？

「いや、そうじやねーよ。いま国語の授業受けてる場合じやないんだ、

部隊崩壊の危機なんだよ。おら、居場所吐けよ「どつちかつていうと道徳の授業なんだけどね」

「いいから吐け、吐かせるぞ」

「やめて、カレーが出ちゃう」

結局小突く。

心なしか喜んでるように見えるのは、さすがは秋月姉妹の元締めという事か。

気持ちが悪い。

「ていうか、ついに部隊なくなるの？」

「ちゃんと聞け、危機だつてんだ。まだだよ」

「いずれなくなる口ぶりね」

「いずれはな」

そもそもが、『敵航空艦隊撃滅部隊設営前段階部隊』と名前の通り、お試し隊なのだ。

テストケースとしての部隊であり、データ取り要員である。

「それにしても意外じやない？ 摩耶が消えちゃうものに執心したり、言うこと聞かない娘にうつつをぬかすなんて」

「そんな僥く生きてねーし、ぞつこんしてるわけでもねーよ。一応隊長然としてねーと評価さがつちまうだろが」

「……まだ第一艦隊に戻りたいの？」

「つたりめーだろうが」

あたしは諦めていない。人間、一度高みに立つとそこに執着してしまふと何かで言つていたが、どんぴしやに当てはまる。

早くあそこに戻りたい。

「ああ、この話するとしんみりしちまうから、さつさと教えてくれ瑞鶴」

「そうなるのはすでに諦めてるからじゃ？」

「重巡キック！」

「（ふつ……！）

まったくもつて酷い女だ。

乙女心にカミソリ当てるなんて。

「……ナイフとかじやなくてカミソリなあたり、やつぱり不良よね」  
「拳を握つて中指の両隣にカミソリの刃を挟むんだよ。そんで殴る。  
殴つた箇所は当然二本の切り傷ができる……」

「やめて、聞きたくない」

「そうか」

「どうか今時の不良もカミソリなんか使わないだろう。多分言葉  
のナイフとかの方を達者に使いこなしてるとと思う。」

「自分で言つてなんだけど、多分どの時代の不良もカミソリはニッチ  
な武器だつたんじやないの？」

「そうかもな」

「そんなことより。

「グラーフとアクイラは結局どこにいる？　ここまで焦らしといて知  
りませんじやあ、タダじやおかねーぞ」

「そういうセリフが、雑談を増す原因なんだけどね。……あの二人な  
ら今頃部屋で荷ほどきしてると思うわよ」

「そうか、それなら入国届けがいるな」

「空母に悪いイメージ持ちすぎでしょ。言えば寮ぐらい、すぐに入れ  
るわよ」

「重巡は存外適当な人種だから、ビザの発行はしてないんだよ。それ  
でもいいか？」

「良いつて言つてんでしょーが」

「ほら、さつさと入りなさいよ。と背中を押される。

「そういうや一航戦はいるか？　ついでに第一艦隊復帰の口添えを頼み  
たいんだが……」

「言いかけ自らの失策を悟る。

「あ、いや。やつぱり今度にするわ、悪かつたな……」

「二度と加賀さんの話するな！」

「いや、加賀。ピンポイントで話してねーよ！」

瑞鶴に一航戦の、というか加賀の話題はタブーだ。

二人は拗れたツンデレ関係にある。

「ああーー！　何が足元にも及ばないよ！　加賀さんのやつ！　腹立

つうう!!

瑞鶴が加賀大好き病を発症してしまったので、そそくさと退散する。

「これさえなけりや、そこそこいいやつなんだがな。残念な女だ。

「ああー……、じやあな。あたし行くわ」

「誰がターキーだこらあ!!」

知るか。

■ ■ ■

「何の用だ」

「おう、菓子折りをちょっとな」

失敗は続く。

こつそりアクイラに会つてバリクソ美味しい間宮をくれてやろうかと思つた矢先、寮のエントランスでグラーフに遭遇した。

「いらん」

「そう言うなよ。日本の菓子も美味いんだぞ?」

比較して言つてみたもののドイツとイタリアの菓子など知らない。ドイツが年輪なのはかろうじてわかるが、イタリアつてなんだよ。

「あ、パスタつて菓子か?」

「蕎麦は菓子か?」

「……違うみたいだな」

それにして空母は面倒なやつが多い。

軽空母くらいのフランクさを見習つてほしい。

「まあ何だ、一人で食つてくれ」

「いらないと言つている」

「なんだと? あんまり拒絶してくれんな。悲しいだろうが」

知つたことかと言わんばかりの面で睨んできやがる。

やめてほしい、実はあたしの心は強くないんだ。

「あー、わかつた。じゃあこれはアクイラに渡しといてくれ。そんでどうしても我慢できなくなつたらお前も食つていいぞ、ほれ」

と言い手を掴み無理やり包みを握らせる。

まつたく、菓子くらい喜んで受け取れ。

巷の女子は甘味で懐柔できると聞く、それに比べてこいつは手間のかかる奴だな。

「……」

「あん？ どうした？」

「……なんでもない」

そうか、と言う前にグラーフは奥に、多分自室に引っ込もうとする。「食つたら感想聞かせろよー」

「……」

シカトだ。つらい。

ところでグラーフは何しにエントランスまで出てきたのだろうか。用事があつてここまできたんだろうに、あたしと遭遇したばかりに引き返したのか？

「……まあ、いいか」

考えても仕方がない。

とりあえず賽は投げたし、あとは間宮に感動したあいつらがあたしに尻尾振るのを待つだけだな。よしよし。

「帰るか」

一仕事終えて清々しい気持ちだ。今日は良い事ありそうだ。もう夕方だけども。

そんな前向きな気持ちで寮を出た。

■ ■ ■

「あ、番長！ ここで会つたが百年目、いざお覚悟！」

「ビンタはしねーぞ」

秋月は、あたしに覚悟を決めさせといて頬を差し出す。

「おかしくはねーか？ 何であたしを身構えさせる？ 居直さなきやなんねーのは、てめーの痛覚じやないのか？」

「え、私の感覺機能は全て正常ですが……」

「生まれ持つたもんがイかれてるのは……、そうだよな、認めたくないよな」

「そんなに悲しそうな目を……！」

「すまなかつたな……」

絡み方が全力投球すぎて鬱陶しい。

今後の課題は上手なあしらい方の習得だな。

「そんな事より袖の下は成功しましたか?!」

「歯に衣を着せろ。お前らは文明を身に纏えねーのか」

「ええー、じゃあ。山吹色のお菓子は渡せましたか？」

「代案になつてねーぞ！」

相も変わらずぶつ飛んでいやがる。

つーかなんでこんな所にいる？ ここは重巡寮なのだが。  
「ところでおい、ビンタ標的器官。 あたしは待機を命じたはずだ、何  
してんだ」

「またまた、番長は『真っ直ぐ帰れ』としか言つてないじゃないですか」「それがつまり待機命令だつてんだよ。命令違反で便所掃除言い渡すぞこら」

「ああ！ それなら心配には及びませんよ！」

「なんだと？」

「なぜなら私たちは全員、一度真っ直ぐ帰った後に数瞬の待機をしてから自由行動に移りましたから！」

「嘘だろ」

「こいつらまじかよ、なに言いつけは守つてますアピールしてんだ。  
「じつとはしてられねーのか」

「過ぎ去る時を、漫然と過ごすのはナンセンスですよ？」

「お前が軍人じゃなかつたら褒めてやつたんだがな」

そのスタンスは規律を守るべき艦娘がとつてはいけない。  
でもまあ、いいか。

ちようど手持ち無沙汰になつたし、暇でも潰すか。

「お前の片割れにさつき脳みその話をしたんだよ」

「局所的で限定的な話題すぎるのでは？」

「脳みそつてつまり頭の話だから、お前には玉つながりで……」

「ああー！　うら若き乙女に何て話をしようとしているんですか番長！　不潔です！」

「誰も金玉の話をしようとはしてねーよ」

「言つてしまつては意味がないのでは！」

「なんだよ、まあそれで睾丸の話に戻すけどな？」

「結局モノの話なんじやないですか！」

いちいち反応がでかいな。

悪い気はしないが。

「陰嚢に毛が生えてる奴とそうじやない奴がいるのは今や常識だな？」

「いつから常識にイノベーションが」

「この陰嚢に生えてる陰毛、抜く時に気を付けないといけないんだよ」「待つてください番長、このなんの役にも立たないお話、話しきるおつもりですか？」

「将来役立つかもしれねーだろ」

「例え男の人ができるとしても、下の毛を引っこ抜く機会は訪れないのでは？」

「わかんねーだろ。多分、まあ、……そうだな」

「諦めた」

細かい事は置いておけ馬鹿。

「で、抜く時に毛が生えてる走行に沿つた方に引っ張らなきゃ血が出るんだよ」

「あああ、色々な意味で生々しい」

「怖いよな」

「はい……。え？　もしかしてこれで終わりですか？」

「なんだよ、欲しがりかよ」

「いや、引っ張った割にはパンチが弱いと言いますか」

「血まで出しといて足りねえってのか？」

「引っ張ったのはお話の方つて意味なのですが」

「パンチが欲しいのか？」

「はい！　あ、いや今のはグーって意味ではなくてですね」

「わかつとるわ」

仕方ねえ、もう少し話してやろう。

何の話がいいかなー。

「……毛つていうのは剃らずに引っこ抜くと危険なんだよ」

「毛え引つ張りすぎでは」

「抜くと皮膚に穴が開く訳だろ？　つまり傷ができたのと同じ扱いになる訳だ」

「ふむふむ」

「で、自然にしどくと傷が塞がるな」

「そうですねえ」

「でも毛はまた生えてくるな？」

「おや？」

「すると皮膚の中で外に出ていけない毛が生まれるんだよ」

「ええ、気持ち悪いですね」

「まあ、学術的な観点から話してるわけじゃあねーから、傷が塞がつてんのか真っ直ぐ生えずに出口直前で小便カーブしてんのかは知らねーけどな？」

「何にせよ嫌ですね」

「だろ？　そんでこの毛、そのまま放置しどくと皮膚下で無限に伸び

「うだろ？」

「知りませんよ……」

「なんと救出するには皮膚を切り裂かなきやいけねーんだ」

「なぜすぐ流血沙汰に」

「金玉傷だらけにしたくなかったら毛は無闇に抜かない事だ、わかつたな？」

「はい！　いや、生えてませんよ!?」

「つるつるか」

「そうではなくて！」

「氣にするな、お前らくらいの年頃なら無くとも氣に止む事はない。  
なんならグラーフとかの真似して自分から剃り込んでいい。」

「グラーフさん達のを見たんですか!?」

「あ？ 想像の話だが？」

「会つて間も無い方々の陰毛を想像するなんて、思考回路アグレッシブ過ぎではありますか？」

「青少年ならみんなそうだぞ」

「私達に青少年ならの話は適応されませんよお」

「それもそうだな。

ところで陰毛の話をしすぎた。食傷氣味だ。

「ほら、次はお前の番だろ？」

「今の話への対抗馬は持ち合わせてないのですが」

「いや、便所掃除の話だ」

「嘘ですよね番長！ その体罰有効だつたんですか?!」

「神聖な罰を体罰と称すな」

「そんな、待つてください！」

「ああ、あたしがクソするまでは待つてやるよ」

「あ、番長が致している間、そのお隣の個室掃除してますね？」

「おい、あたしの排泄音を聞こうとするな」

「集音器とかつて幾らしますかね？」

「録音は控えろ」

「下から覗くのはありますか？」

「倫理つて言葉を知らねーのかよ」

まあ仕方がないから便所掃除は免除してやろう。

罰を与えるだけではいつか噛みつかれる可能性も出て来てしまう。  
引き際は大事だな。

「そういえば番長、バルトリーンと言うものをご存知ですか？」

「何だそれは、新しい兵器かなんかか？」

「このバルトリーンと言うものは物理的な損傷を防ぐものなのです

「はあ、便利だな。で？ 結局何だ？」

「はい！ 女性器の分泌液を排出する穴の事です！」

「その話は何かまずいだろ！」

「なぜですか！ 男性の方は良くて女性の方がダメだなんて差別です

！ フエミニズムの敵です！」

「 そうは言われても。正直な話をすれば多分玉の話もだいぶギリギリを攻めていたので、どつちもダメだろう。

「あたしが言つてんのはな、男女が揃うのがダメだと言つてるんだ。いいか？ 片方の話をしたらもう片方は控えろ」

「それはきっと何の解決もしてはいない気がしますが心得ました！」

「よろしい」

「ホモは許されるという解釈でよろしいですか?!」

「よろしくねえ」

良いわけねーだろボケナスが。

「ではレズは？ これなら番長も満足なさるでしょウ?!」

「なぜ満足すると思った。そう言う話じやねーんだよ」

「いけねえ、段々とめんどくさくなつてきた。そろそろ逃げるか。

「ああー！ やつとこエンジンかかつてきましたよ！ 番長、もつと私と遊んでください！」

「あたしが逃げる算段を立ててる最中に追加注文するな

「逃がしません！」

「ここで背後から夾叉だぞ隊長」

「初月だと」

「うおー！ 姉妹でサンドです！」

「おかしい、なぜ初月までいるのだ。

「こいつの出番は照月の次のはずだらう。

「出番とか、何の話をしている隊長」

「誰もが次は照月だと思ったはずだ。空気を読め馬鹿たれ」

「何の話をしているんだ」

「初は空気を吸つて吐く事しか出来ないので無駄ですよ番長！」

「おい、言われてるぞ変態」

「隊長の中を循環した謂わば体液とも言える物質を僕の中に取り込み再び隊長の中にお返しする能力を有していると考えると興奮するな」「一息に凄い気色悪い事を言うな」

「初がいると全ての人間が普通に見えるステキマジック！」

「本当にな

初月がいると、こちらが一生懸命考えた話が霞むから正直帰つてほしい。

「ところで秋月姉」

「はいはいなあに？」

「君がいると純粹培養の隊長工キスが採れない。息を止めていてくれ

れ

「お前それは、お前」

「……」

「おい、本当に止めるな」

「隊長、こちらを向いてくれ」

「犯行予告をあつさりするな」

「早く！ 秋月姉はそこまで長く口を閉じてはいられない！」

「好都合じゃねーか」

「あ、良い事思いつきましたよ」

「ほう、聞こう」

「私が隊長の呼気を吸い込んで初の口元まで輸送するんです。そうす

れば良いのでは？」

「待て、お前それは純粹にキモいしうつかり初月の要望もガン無視してんぞ

「いや、それでいいこう」

「何でだよ」

「この際僕は何でもいいんだ！ 美少女二人分の循環液を体内に吸収できると考へれば全て丸く収まる！ さあ、実行しよう！」

しねーよ。

考へる事が人類に許容された範疇を凌駕し過ぎている。

神は何を考へてこんなに重たい咎を背負わせたのか、さすがに可哀想だ。

「ふ、まあいいさ」

「何をクールに決めてやがる」

「僕は知つてゐるんだ。人間の皮膚は不感蒸泄という形で体液を排出

している事を。つまり隊長の下肢に顔を近づければ、いや、隊長の股ぐらに顔面を密接させればそれだけでいいのさ」「

「凄い！　これは私もびつくりの発言です！」

「おい、姉にもどんびかれてんじやねーかよ」

「では失礼して」

「キック！」

「痛い！」

秋月も引いてるかと思いきや感心しているだけだった。

二人してあたしの身体に擦り寄るな。

「何なんだよお前ら。ちょっと変だぞ」

「ちょっとと言わずたくさんと言つてほしい」

「このちょっとは尺度じやねえ。拒絶の心だ」

「日本語は難しいですね！」

「てめーらの性癖ほど難解じやねえ」

本当にここいらでやめにしないと無限に無駄話が展開されそうだ。  
ほんの出来心での暇つぶしだったが、こいつらの手にかかると身の危険まで考慮せねばならなくなる。怖い。

「おい、そろそろあたしは部屋に戻るから、お前らもはけろ」

「あ、そうなんですね。じゃあお泊まりグッズがりますね」

「何泊するかは不明だが、パンツだけは多めに用意しよう」

「は？　営倉に荷物持つてけるわけねーだろ。手ぶらで行け」

「え、番長つて営倉で寝泊まりしてるんですか?!」

「意外と質素儉約な生活をしていたんだな」

「二人分の営倉、まあ空いてるだろう。ついてこい」

「いやつたー！　番長のお部屋にお泊まり！」

「あ……、僕は遠慮しよう」

「どうした突然、気にする事はねえ。さあ、来い」

「済まない体長、僕ら二人突然用事が出来たんだ。これで失礼する」

「そんなものありま……！」　むごむご

どうやら初月は気づいたようだ。秋月の口を抑え撤退の準備を始めた。

「そうか、残念だ。でも来たくなつたらいつでも言えよな、憲兵には話を付けておくからよ」

「……ああ、うん。平氣だ。たつた今、雅やかな御心を手にしたから、氣を遣わないでほしい」

「そうか」

よし、撃退には成功したみたいだな。

初月が微妙に察しが良くて助かつた。実際には、あたしは軍規に触れてない奴を営倉にねじ込むだけの権限はない。

面倒だから嘘をついた。バレる前にあたしもトンズラしよう。

「じゃあお前ら、自室で待機すること。いいな?」

「了解」

「よろしい」

達者でな。と言い残したあたしはこの場を立ち去つた。

■ ■ ■

日もどつぶり暮れた。

もう今日のタスクは何もなく、あとは飯を食つてクソして寝るだけだ。

ということで食堂へ向かう。途中照月に遭遇するかと思ったのだが、何と誰にも会わずに食堂の席に着けた。

それだけではなく食べてゐる最中もトイレにいるときも、誰の影に怯える事なく済んだ。

正直物足りなさを感じている。

「そう言うと思つていたんですよ隊長」

「言つてない」

風呂場だ。

あたしが全力で羽を休めなければいけない場所だ。

「最初に言つておくがこの場であたしを怒らせたら、もうあれだぞ」「どれでしよう」

「怒るぞ」

「あ、え？」

湯船に浸かりぐだつていたら照月がすり寄ってきた。

ゆつくりしたいから構つて欲しくないので釘を刺す、が面倒くささが先行し中途半端に終わる。

「隊長お疲れでしようか？」

「……そうだな」

「そうですか」

やけに聞き分けがいい気がする。普段からこうしていればいいものを、まあいいか。

「そういうえば隊長はご存知ですか？」

「あ？ 何をだ？」

「このお風呂、実はアルカリ性のお湯なんですよ」

「へー、そうなのか。もしかしてこの肌がヌルヌルするのは、そのアルカリ野郎のせいなのか？」

「アルカリ野郎という呼称はさすがにヤバさを感じますがその通りです」

「なんでぬめるんだ？」

「人間の肌が弱酸性と言うのは、さしもの隊長でも存じているかと思うのですが」

「いま馬鹿にしたか？」

「とんでもないです」

隙あらば人を貶すこいつらのスタンスは眼を見張るものがある。もつとあたしに気を抜かせる、気づかえ隊長を。

「肌は弱酸性で保たれていますが、アルカリに触ると溶けるんです」「は？ ジゃあこれに浸かりっぱだとそのうち消えて無くなっちゃうってことじゃねーか」

「いえ……、そんな兵器じみたもの溜め置きませんよ？」

「腹まわりが気になりだしたら丁度いいかもな」

「おっぱいも減量しそうですね」

「それは困るな」

この年齢になつてようやつと大きくなりはじめたんだ、消えても

らっては困る。

「肌、というよりも古い角質が溶けたものがそのヌルヌルの正体です」「なるほどなあ」

「そのため、こういったアルカリ性のお風呂や温泉はその性質上、お湯が出ているところ以外は他人の垢でいっぱいなんですね！」

「汚ねえ！」

「ぬめりの正体は汚物と言つて差し支えないでしょう」

「最悪な気分になつちまつた」

なんで人がくつろいでいる時に、それをぶち壊す情報をリークするんだこいつ。

「ちなみにこの現象は、おむつかぶれと同じです」

「おむつかぶれって何だ？ パンツのゴムで赤くなるみたいなもんか？」

「まあそれもそうですが、ここで私が言うおむつかぶれとは、糞尿でかぶれることを言います」

「何でお前らつて会話に下ネタねじ込むんだ？」

「隊長の背を見て育つてますから」

「いま馬鹿にしたか？」

「どんでもないです」

この風呂が垢まみれだとは知らなかつた。とは言え他人と入る風呂なんてどこでも汚いと言えば汚いので、どうでもいい気がする。

「隊長」

「なんだ？」

「百数えたので私は先にあがりますね？」

「……そとか」

百数えてたのか。随分と可愛らしいことしてんだな。

そういうやあたしも小さい頃は数えてたな。

まあ、愛宕の姉貴に無理矢理やらされてたんだけども。

さすがに陰毛を百本数えると骨が折れますね。えへへ

「気持ち悪つ！」

想像を絶する気色の悪さだ。

なに陰毛を数えるつて。

「あ……、そうですよね」

「自分のイカれ具合についてに気がついたか」

「さすがに数を数えてからお風呂を出るだなんて、子供っぽすぎましたよね……」

「そうじやない」

「次からは、私より大人な隊長の陰毛を百本お借りしますね」

「誰が貸すか！」

「陰毛借りるつてなんだよ。おそらく人類史上初めての発言だろう。  
「そんな……。あ、では代わりに私の毛と交換つこいたしませんか？」

「それなら隊長も満足していただけますよね」

「お前と陰毛を植毛し合うつもりはかけらもない」

「一本いっぽん丁寧に抜き取りますのでご安心ください」

「そういうやさつき、秋月に陰毛を引っこ抜く手順をレクチャーしたんだよ」

「え」

「今晩は鉄のパンツ履いて寝ろよ」

「唐突に私の貞操に危険が」

「じゃああたし、あがるから」

私も一緒に、と言う照月を伴いあたしは風呂を出た。

結局ゆつくりはできなかつたが、何となく気持ちは落ち着いてしまつた。

### 第3話

私たちがその気になれば、なんでもできる。

■ ■ ■

「今日からお前らの対空戦闘訓練を本格的に開始する。協力者はグラーフとアクイラだ、ばんばん撃ち落としていいぞ」

「……」

「……」

「おいグラーフにアクイラ、意氣込みが聞こえないぞ」「喋っていないからな」

本日はいい天気だ。実に訓練日和と言えよう。それなのにグラーフ達ときたらやる気が見られない、ガキどもを見習つてほしい。

「番長！ 今日の天気予報ちゃんと見ましたか?!」

「当然だ。あたしの朝は、お天気お姉さんと共に始まる」

「今日台風来ますよ?!」

うるさいな、知ってるよ。でも仕方がないだろ今日のために結構準備してきちゃつたんだよ。

「ピーヒヤラピーヒヤラやかましい。ちよつとはグラーフを見習え」

「隊長、それは少し都合が良すぎるんじゃないかな？」

「隊長、手のひらを返しすぎると腱鞘炎になっちゃいますよ？」

「助けるアクイラ」

「ええ……？」

「どうなんですかアクイラさん?!」

「さあ、答えてもらおうか」

「ちよつとお」

最近気がついたのだが、アクイラはあたしのスケープゴートに向いている。

この調子でどんどんこいつらの相手をしてほしい。「どうでグラーフ」

「……何だ」

「菓子食つたか？」

「食つた」

「うまかつただろ？」

「……」

「なぜ途中で喋るのをやめる？ 生理か？」

「あ！ 番長がグラーフさんをナンパしています！」

「丁度いい、グラーフはバッテリー切れだ充電してやれ」

「それ以上近づいてみろ、殺すぞ」

「圧倒的に近寄りがたいな。僕はまだ死にたくない」

「うおー！ 私は行きます！ でも、死なば諸共ですよ番長！」

「助けろアクリラ」

「……私は照月ちゃんと遊んでいますね～？」

「訓練しろ馬鹿」

さて、じゃあ早速訓練に移行しよう。

艦装はすでに艦検から取り寄せている。

そういうえば艦装の使用申請を出しに行つた時の艦検どもの顔は忘  
れられない。「え、正氣？」って顔をされた。

「隊長、これは僕の予想なのだが、艦検だけでなく事務にも同僚にもヤ  
バいやつだと思っていたのではないか？」

「何だと、上司に向かつて暴言か？」

「そうだ」

「何を開き直つていやがる」

「罰を与える」

「出番だグラーフ」

「僕が悪かった」

ヤバいやつと思うのは勝手だが、こういう荒れた日こそ訓練をすべきだろう。ラノベで読んだ。

「番長！ さすがに命を張るタイプの訓練でラノベをエビデンスにす

るのは、はつきり言つてクソ野郎です！」

「ちょっと待て、今のは傷ついた」

そういうや秋月型は横文字好きだよな。時々なんて言つてゐるのかわからなくて困る時がある。

会話は一人でするもんじゃないんだから、皆がわかる言葉を使つてほしい。

「知らなかつたのか隊長。人に言われて嫌なことは自分も言つてはいけないのでぞ」

「わかつた、これから暴言は改めよう」

「……え！」

「どうした照姉？ 隊長にイジめてもらえなくなりそうで焦つているのか？」

「ち、違うよ?!」

「照は欲しがりさんだから……」

「おい、訓練をするならさつさと準備をしろ」

「あ、はい」

「ごめんなさい」

「すまなかつた」

グラーフがしごれを切らした。というかこいつらグラーフに苦手意識持ちすぎだろう。

普通に怯えてんじやねえか。

「おい秋月、お前らグラーフ苦手すぎないか？」

「番長？ そういうのは本人を前にして言つてはいけないんですよ？」

?

「馬鹿を言え。あたしだつて断腸の思いで言つてんだよ」

「嘘下手くそか隊長」

「隊長は嘘をつく訓練をした方が良いと思いますよ？」

「このまま不和を抱えたままじゃいけねーだろ。おい、仲直りする勘察を同室にするかの二択だ。選べ」

「うおー！ 実質一択！」

「貴様ら早く艦装を背負え」

「……はい」

よしよし、なんだかんだ言つてグラーフは訓練に前向きみたいだ

な。安心した。

早くしろ、だなんて誰よりもやる気じやないか！

「いやー、ほらお前ら。せつかくグラーフがやる気なんださつさと支度しろ」

「……本当にやるのねえ」

「どうしたアクイラ、具合でも悪いのか？」

「天気が悪いのよ？」

「よしよし、いい天……。いえ、嘘はつけない」

「正直か、でもこれは決定事項だ。いいか？　日本では一度決まつたことを覆すには、自身の進退をかける必要がある」

「そんな……」

「上司に刃向かうと、明日からデスクがなくなるぞ氣をつけろ」

「陰険すぎるわ……」

「おもてなしつてやつだ」

「隊長、そもそも僕らにデスクはないぞ」

「お前らは知らないと思うが、あたしらにはある」

「ええー！　本当ですか？！　明日乗つかつてもいいですか？！」

「デスクに乗つかるって何？」

「誰よりも一段高い所でサターナイトフィーバーするんです！」

「営倉でやつてろ」

さて、いい加減にしないとグラーフがブチギレる。全員の準備も整つたので、さあ行くか。

「抜錨だ」

■ ■ ■

抜錨だ。とキメてみたものの、この天候は馬鹿だろ。舐めてんの？  
「おらあ照月い！　死にたくなきや舵を取れ舵を！」

「や、やつてますよお?!」

「敵艦載機来たぞ！ 対空戦闘よーい！」

「番長！ 構えるだけで精一杯です！」

「秋月舵忘れてんぞ！」

「僕らは二つのことを同時にできないからな！」

「堂々と言うな！ ……よし、各員対空機銃斉射あ！」

「うおー！ 当たる訳がない！」

「気合が足んねーぞおらあ！」

大時化（しけ）もいいところだが、こいつらの手前、あたしがぶーたれるわけにはいかない。

それにもグラーフもアクイラも容赦がない。訓練だし、まあ手加減する必要などないのだが、結構苛烈だ。

「番長！ 訓練だから手加減しない、つて少し変では?！」

「あ?! どう言う意味だ?！」

「訓練で手加減がなければ、どこで手加減を拝見できるのでしょうか！」

「深海棲艦にでも聞いてみろ！」

「今日の隊長は無茶しか言つていらないな！」

対空機銃を使用した訓練はこれまでにも行つてきたが、今日ほど厳しい条件下は初めてだ。

まず足場が安定しない。

普段は脚部艦装のスタビライザーがそれなりに作動するので安定する。加えて——習熟度によりけりだが——艦娘、人型艦艇という性質上、二本足でバランスを取ることが可能なため、より安定性はより増す。

しかしこまでの時化では、艦装も艦娘故の利点も意味がない。

ただただ個人のセンスだけが頼りだ。

センスが頼りって、これ訓練する意味あるのか？

「きやあ！」

「秋月姉さん！」

「隊長お！ あの、お聞きしたいことが！」

「は!? やかましい! こっちが聞きたい!」

そして次に、なぜか迫つてきている艦載機の半分が、実弾を放つて  
いる点だ。尊い犠牲のもと、今気がついた。

「あいつら馬鹿なんじやねーか?!

「ぐうう……、私の明晰な頭脳によると、恐らくこれはグラーフさんの  
仕業です!」

「元気そうだな秋月!」

「まだやれます!」

「本当に命を張つたりするなよ?!」

「そのさじ加減は、グラーフさんに聞いてみてくださいっ!」

「やい! 手加減しろお!」

「本当に聞いた……!」

まあ聞こえるわけもなく、何考えてんだ本当に。

ブチギレそう。

ただこのまま終わるわけにもいかないので、絶対にぶつ殺してや  
る。

「おい、被害報告しろ」

「秋月、左舷軽微損傷! 小破です!」

「照月、主砲損壊。小破、辛いです」

「初月、無傷だ。残念ながら」

「残念なのはお前の頭だ!」

各員、パーセンテージで見れば無傷に等しい。しかし秋月は駄目  
だ。足はどれだけ軽い損傷だとしても、敵からしたらいい的になる。

「よし、あたしにいい案がある!」

「ふむ、では僕が的になろう

「黒い魚みたいなことをのたまうな」

「どうせ突貫だろ隊長」

「なぜわかつた」

「隊長の前頭葉には僕の精神が宿っているからな。当然だ」

「気持ち悪つ! でてけよ!」

「あ、隊長。私が頭をかち割りましようか?」

「さては根に持つてゐるな照月？」

「あの！　お楽しみのところ申し訳ありませんが、私の艦装を慮つていただければ！」

「おう、すまん秋月」

つい雑談に興じてしまつたが、代償は秋月の艦装が払つてくれたらしい。さらに機銃の掃射を受けており、どうみても中破だ。

すまねえ。

「ではこれより、敵に突撃をかける。あたしと初月が突つ込むから、残りはここでお留守番だ」

「任せろ」

「ああ、動きが鈍いです！」

「秋月姉は私にお任せください」

「おう、じゃあ行くぞ！」

「お前、あたしに対する信頼と敬意が足りなくないか？」  
「ふん、……おつと。いやなに、こうすればいじめてもらえると思つてな？」

「あぶねつ！　……自分の性癖に他人を巻き込むのはよせ」「善処しよ、う！」

相手に近づくにつれ、攻撃が激化してくる。いや、おかしくないか？　あいつらどんだけ艦載機積んでんだよ。これ訓練だぞ。  
さては奴らあたしらをここで沈める気だな？

「それは本当にシャレにならないな、隊長！」

「国際問題になりそうだ！」

「将来のために、裁判を経験しておくのはありかもしねないな！」

「ねーよ！」

「ははっ！　返しが雑になつてきたな！」

「くらえつ！　……くそ、やかましい手を動かせ！」

「心得た！」

本訓練は、あたしたち対空戦闘班とグラーフ・アクイラの空母班に分かれており、両者は遮蔽物を挟む距離20000を開始地点としている。

人間の身からしたらかなり距離はあるが、艦を宿している我々はそれなりに速度が出るので飛ばせばすぐだ。

とは言え、あたしが全力で航行してもだいたい20分はかかる。  
「……なあ隊長、気合いで速くできないのか？」

「やかましい、あたしより速力ねえくせに煽るんじやねえ！」

「ふつ、そんな紙に書いてあるスペックで語られてもな」

「なんだと？」

「見せてやろう。隊長よりもおっぱいが足りない分の速力を……！」  
「……みつともない！」

何をふざけた事を言つてんだ、と思つたら本当に加速し始めた。速いという事はおっぱいがないという事なのか？　限界を超えた貧乳なのか？

「ふはは！　コツはおっぱいを抉るように走る事だ！」

「無茶言うな！」

抉つちやダメだろ、空気抵抗増すし。

「は？　そしたらおっぱいはより鋭角にする方がいいんじゃないかな？」

「？」

「なに」

「大気を味方につけるには尖らせた方がいいんじゃないか？」

「くそっ！　負けた氣分だ。しかし隊長、もしそうならばもつと胸を張つて航行してみてはどうだ？」

「ん？　ああ、確かにそうだな」

「……どちらのおっぱいへの哲学が正しいのか、競争だ！」

哲学もここまでバカにされたのは初めてだろうが、まあおっぱいで速くなるのならそれでもいい。許せよ哲学。

そんなバカをやつているうちについにグラーフ・アクイラ両艦を目標できた。心なしかアクイラは顔が青ざめて見える。

「あちやあ、困つたな。アクイラ風邪でも引いたか？」

「なるほどな、では僕が温めよう」

「あたしがボケたら突つ込んでくれる？」

「隊長に突つ込んでいいのか？」

「今日は鉄のパンツ履くわ」

アクイラは真面目だからあたし達に実弾をぶつけた事に焦つているんだろう。アクイラは模擬弾しか使用していないからただの貰い事故だけども。

そう、だから本当にやばいのはグラーフだ。何がやばいって普通に営倉入り確定なのに、なおも顔色を変えずに実弾を放つてくるところだ。

「隊長？ あの人開き直っているのか？」

「知らねーよ……。とんでもない胆力ウーマンだな」

「罰としておっぱいを揉みしだいてもいいか？」

「屈辱だろうな」

「真面目に答えてくれ！」

「慎重に検討する」

「よし！」

何故喜んでいるんだこいつ。

「可能性がゼロでない限り、僕は諦めないからな」

「得意げにキモいな」

「得意げにキモい」

復唱するなよ。

「素敵な響きだ、朝の挨拶にしてくれ」

「グラーフ！ ようやく会えたな！」

「シカトだと？」

ここまでであたしは小破、初月は中破といったところか。

あたしはいいとして、初月は多少心もとないな。

対する空母どもは当然無傷だ。

絶対に抉つてやるという決心とともに、奴らに呼びかける。

「……ち、ここまで来たか」

「あ、あのね？ これはその……、違くて」

艦載機をなおも発艦させるグラーフは、その眼にギラつくものを見ていた。一方アクイラはおどおどしている、きつとグラーフを止めようとして失敗したのだろう。

「隊長！ どちらの乳を揉んでいい?! 早く決めてくれ！」

「アクイラはかわいそうだからグラーフにしておけ」

「あ……、うん」

普通に怖気づいてんじやねーか、まあこいつの変態度もこんなもんだろう。

よく頑張ったほうだ。

「おい、怖いならやめておけ」

「そんなのダメだ！」

やめろ頑張るな。

「おっぱいに貴賤はないし、どんな破綻者が持つていようともそのおっぱいに罪はない！」

「そうか」

「逃げるなど、僕の魂が叫んでいるんだ！」

「そうか」

なぜ限界を超えていく、踏みどまれよ、常識で。

「よく聞くがいい空母の二人よ！」

「おい勝手に演説を始めるな」

「僕が成敗する！」

「聞こえは良いけどな」

実際はセクハラを公言しただけだ。

さて、しかしそれで困るのはやつぱりアクイラだ、あたしとしてはアクイラを罰してもしようがない。

グラーフを抉らねば。

「隊長、抉りたがりな年頃か？」

「どうにもおっぱいを抉るつて語感が気に入っちゃった」

「獵奇的すぎないか？」

「Aカップにしてやる」

「抉った部分は僕が貰つてもいいか?」

「何に使うの?」

「ふふ」

ふふつてなに、怖すぎんだろこいつ。

「おい、こいつにおっぱいを独り占めされたくなれば投降しろ」

「……訳のわからない事を言うな」

「訳のわからない状況に陥りたくなればごめんなさいしろ」

「断る」

うん、そだらうな。簡単に応じるならばこんな強行には出ないだろう。

そもそもこういった説得にわかりましたって言っているやつを見たことがない。様式美なのだろうか? この問答は。

「おーいアクリラ、お前は戦線を離れる。うつかりおっぱいを消失することになるぞ」

「……あのね? 本当はグラーフは」

「攻撃隊、出撃」

「グラーフ!」

「おいこらグラーフ! 会話くらいさせろつていいつも言つてんだろーが!」

「問答無用! 行くぞ隊長!」

「お前も案外血の気多いよなくそ!」

グラーフから発艦された艦載機はさほど多くはない。ここまでたどり着くのにそこそこ潰したからだ。

しかしこちらは全艦模擬弾しか積んでいなかつたので手間がかかつた。そのため被害は深刻なものになってしまったのだが、結果的に思う存分砲撃を当てるに考えれば、まあいいだろう。

「おい変態! お前はあたしの背後につけ!」

「ふざけるな! 隊長を弾除けにできるか!」

「言うこと聞けないなら、あいつらのおっぱい揉ませねーぞ!」

「ピタつ!」

うわあ、こいつピタつて口で言つた。

まじキモい。

とは言えちゃんと従つたのは良かつた。こんな土壇場で味方にも問題を抱えるのは、「めんすぎる」。

「よし、対艦戦闘よーい！」

「対艦戦闘よーい！」

「攻撃隊、蹴散らせ……！」

あたしは、装備はレーダーやら機銃やらを多く積んでるので、主砲は三号一基のみである。初月に至つては高角砲が頼りだ。  
まあつまり、余裕だ。

「てー!!」

「F e u e r!」

互いの攻撃が交錯する。

■ ■ ■

ここは『人型艦艇用船渠』である。まあ要するにドックとか呼ばれてる場所だ。

昔は乾ドックとかいつて、文字通り船を水に浸けず修理してたらし  
い。詳しくは知らんけど。

まあそんなことより、重要なのは過去ではなく今だ、今は乾ドック  
ではなく湿ドックだ。

なぜなら……。

「番長！ 大変です！」

「そうだな」

「水鉄砲忘れてきちゃいました！」

「本当だな」

「隊長……、その……」

「便所なら一人で行け

「ち、違います！」

「隊長、心配いらないぞ。照姉の廃液は僕が飲み干す」  
「死ね」

ご覧の通り現在のドックと言えば艦娘用の入渠ドック、つまりは風呂場を指すからだ。

傷に染みる。

「……」

「……」

「おい貴様ら、何でそんなに離れた場所で湯に浸かっていやがる。もつと近くに寄れ」

「あ！ 番長が外人組に公然セクハラを！」

「なに、僕も混ぜろ」

ドックは不可思議な効力が働いており、何だかわからないが傷が治る。かなりキモい速度で怪我が治るので見ていて気持ちのいいものではない。

以前に、あまりにも生理的に受け付けない修復を見てしまったことがあつたので、「これは何だ」とドックに詳しい明石に聞いたのだが、なぜだか泣き出してしまった。そんなにやばいものなのだろうか？

「隊長？ おそらく、明石さんは隊長が怖くて泣いちゃつたんだと思いますよ？」

「馬鹿を言うな。怖れからもつとも遠い位置にいるあたしを怖がるだと？」

「あー！ 番長がまた寝言を言っています！」

「僕らの隊長は睡眠障害を患っていたのか」

やかましい、あたしのしゃべりを遮るな。

「おいグラーフ、特にお前は罪が重い。あたしの命令にはワンと鳴いて服従しろ」

「ワン！」

「……わ、ワン」

「わんきゃんうるせーぞクソども」

「きやいーん」

「わおーん」

「助けろアクリラ」

「あ、その。……わん」

本当に言うなよ。虐めてるみたいだろ、風評被害が出回つたらどうしてくれる。

「安心しろ隊長。すでに手遅れだ」

「どういうことだ」

「隊長？ 私たちを毎日虐めているのを忘れてしまったんですか？」

「虐めてねえ、教育だ」

「クソ教師感あるな」

さて、先ほどの対空戦闘訓練は無事終了した。誰も怪我せず禍根も残さずみんな仲良しで終了した。

「番長今日つてエイプリルフールでしたつけ？」

「何わけのわかんねえこと言つてんだ」

「隊長の記憶は失われた。先の訓練で高次脳機能障害を患つた」

「唐突に難しい日本語をぶっこむな」

「……ぶっこむ」

「おいむつつり、公共の場で盛るな」

「ち、違います！」

詳細を語ると、双方が攻撃を繰り出しなんやかんやあつて初月が落ちて、うつかりアクイラをやつてしまつて、最後にはグラーフをぶん殴つて終わつた。

高雄型は肉体言語が好きなのだ。

「仕方ねえ、グラーフが来ないのならこちらから行く」

「え！ 正気ですか番長！」

「もちろんだ」

「隊長、今日はフルスロットルだな」

「よし行け初月」

「え！」

「何を驚いていやがる、抉つてこい」

「心の準備が……」

「いまさら初心かよ」

「おっぱいの準備が」

「年単位で準備が必要なことをかますな」

お前のおっぱいの成長なんぞ待つてられるか。

ざばざばと、仕方がないので自分がグラーフに近づく。

おら、わざと波立たせてやる。

「……近づくな」

「ワンと鳴けば認めるぞ」

「……」

「沈黙はなんとやらだなあ、おい」

「やだ、番長ヤの字」

「多分チンピラだと思うぞ」

「隊長は不良です」

うるせえ、役満感だすな。

「おら、何であんなことしたか話してもらおうか」

「うるさい」

「パンチ！」

「ぐつ……?!」

「あー！ 暴力に訴えた?!」

「あたしはガキだろうがガキっぽい大人だろうが、分け隔てなく教育をする平等原理主義者なんだよ」

だからでけー声で暴力つて言うんじやねえ。肩を組み穩やかに問い合わせてるだけだろうが。

「隊長、誤解を招くようなことを言うな。それは穏やかではなく恫喝しているだけだ」

「ジャンプしろって言いそうですよ？ 隊長」

「あああ、あの！」

なぜこいつらはわたしを不良に仕立て上げようとするのか？ 酷い奴らだ、酷い奴らだが、アクイイラがついに口を開いた。

「お前、ワン以外に口を開けたのか」

「んもー！ 番長はすぐそうやって話の腰を折るんですからー」

「折りたがりですね」

「鰯とかすきそうだな」

「おめーらに言われたくはねえ」

あと鰯折りはさすがにしたことはない。馬鹿にするな。

「……あの」

「おう、喋つていいぞ」

「氣をつかうな、どしどし喋れ。

「あー!!」

「てめーまじ、黙れよクソガキ」

「隊長が言えたことではないな」

「あの!」

本当にすまないとは思う。

話してくれ。

「グラーフは……」

「もしかしてグラーフさんは、番長のことが好きなんですか?!」

しばらくぞ糞餓鬼、と口に出す前に手足が出ていた。

とは言え、この処置は真っ当なものだ。こいつはそれだけ、あたしの寛大なる堪忍袋をズタボロにしたのだから。

と、そんなあたしの尻目で、あたしの腕の中にいるグラーフが震えていた。